

春の雁

吉川英治

青空文庫

春の雁はるかり

からつとよく晴れた昼間ほど、手持ち不沙汰ぶさたにひっそりしている色街いろまちであつた。この深川では、夜などは見たこともないが、かえつて昼間はどうかすると、御旅おたびの裏の草ツ原で、子を連れて狐が陽ひなたに遊んでいたりする事があるという。

——通船楼つうせんろうの若いおかみさんは、

「何だえ、包み始めてさ。……負けずに持つて帰るつもりかえ」
齒ぎれのいい女だけに、笑いながら云つても、人を蔑さげすむように美しいのである。

清吉は、頭を搔いて、

「だって、御察人様、何ぼなんでも、この唐棧を、十七両だな

んて」

「高価すぎるかえ」

「ご冗戯でしょう。新渡じゃあござんせんぜ。これくらいな

古渡りは、長崎だつて滅多にもうある品じゃないんで」

内緒部屋の障子の棧には、絶えず波の影が揺らいでいた。すぐ

裏手が、晩には猪牙の客を迎える狭い河だった。

「どうするのさ」

通船楼の若いおかみさんは、清吉には苦手なお客様とみえる。

せめて二十両でといえは、良人に着せるのだから、自分の

存ちぞんではそう高く買えないと云う。

「じゃあ、とにかく、置いて参りますから、旦那様にもお目にかけた上でひとつ……」

そこらへ並び散らしてある他の鼈べっこうもの甲物だの、縞しまだの、珊瑚さんごだの、香料だの、青磁せいじだの、支那文人画の小点などを、片手に提さげられるくらいな包みに小ぢんまりと纏まとめてしまうと、

「これでいいだろう」

金を出して、通船楼つうせんろうのおかみさんは、唐棧とうざんのひとまき一巻を、自分の後ろへころがした。

数えてみると、二十両あるので、清吉せいきちはかえつて眼をみはつてしまった。まだ二十歳はたちを幾ついも出ていまいと思われるのに、青

い眉と黒豆のような歯並びをしているおかみさんは、

「ホホホホホ。擲揄からかつて上げたんだよ」

と、独りひとでおかしがった。

「へえ、ひどい事を！」

「あたりまえさ。良うちのひと人にわたしが見立てて着せようというの

に、穢きたない値切り方をしたの、買い惜しみをしたのと聞いたら、着

るにも気きしよく色が悪いと云つて、良人だつて着やしないし、わたし

の意気だつて届かないじゃないか」

「これはどうも、手放てばなしなところを」

「お惚のろけちん気賃は、前払いで云つている筈なんだよ」

三両の聞き賃かと思えば、ごもつともでいくらでも神妙に聞

ける。勿論、清吉だつてまだ若いのだし、木の股またから生れたのではないから、こんな女の素惚すのろけ気は決していい気持なものではないが。

それに清吉は、三年のうち二年を旅暮しで送っている身だつた。家は長崎で、反物たんものや装身具や支那画などの長崎骨董ながさきこつとうを持つて、関西から江戸の花客とくいを廻り、あらかた金にすると、春はるの雁かりのように、遙々な故国ここんくへ歸つてゆくのである。

ここの世界

清吉の花客とくいさき先は、上方でも江戸でもたいがい花柳界だつた。

金持らしい金持となると、近づき難いし、骨を折って出入りしても、買物となると、横柄おうへいぶつっているわりに、貧乏人より金には細かくて、彼に云わせれば、

(みみツちい、見かけ倒しなボロ客だ)

そうである。

第一、鑑賞の眼がない、下駄まきえに蒔絵まきえをしたり、裾模すそもよう様に珊瑚さんごを入れたりして、豪奢ごうしゃぶつているのが多いのだ。唐棧とうざんの新渡こわたも古渡こわたりもわからないでは、一反の縞かみに、二十金も出すような物好きにはなれない。そういう物好きの多いのは、やはり天下の狭き斜ようしやの街のうちでも、この深川に越した所はないように思われる。

そんなわけで清吉は、ずいぶん諸国の花明柳暗かめいりゆうあんの里を見て来ているが、およそこの深川ほど、意気だとか、きやんだとか、不可思議ふかしぎな女だまशीいと、あそびの世界の燈火ともしびとを、まるで名匠の芸術的事業でもあるように、客も妓おんなも、茶屋や船頭に至るまでが、競い合つて研みがんでいるなどという所は、およそ他国の遊び場所では見られないものだった。

——だから、ここではいい商あきないも出来たが、来始めの二、三年は、この土地の人間きだての氣質あきなというものが分らなくて、清吉は呆あつけ気に取られてばかりいた。——分らないといえば、馴染なじみになつても、いまだに分らない問題に度々ぶつかる。

つい昨日きのうも。

やぐらした 櫓 下のおおすみやの大隅屋へ商いに行つて、茶ばなしに聞いていた話

なのであるが――

其家へよく来るお客で、あだな 綽名を「黒くろさん」とも「能のうの面めん」とも
いわれているお客がある。金切れもわるいし、御面相ごめんそうは綽名の
とおりにしするのだ。

(また、能の面の口だとさ)

と聞くと、何家どこの妓こも逃げを張つて、花代はなに依らず、座敷へ出
てがない。

すると、お鷹たかという妓こが、

(わちきが、いいお客にしてみせよう)

と云つて好このんで出たが、同時に、べつな家のお蝶ちようという妓も、

(そんなに持てないお客なら、わたしが持てるお客にしてみせると、自分から進んで座敷へ買つて出た。

四、五たび両妓がぶつかううちに、当然、黒さんを挟んで張りツこになった。お鷹は、お蝶に情夫があるのを知っていたので、(おまえの心意気か知らないが、そんなおせつ介に出なさんして、忠さんによいのかえ)

痛いところを、黒さんの前で素ツば抜いた。

するとすぐお蝶は、恋人を呼びにやって、黒さんの眼の前で、無理に切れてしまったというのである。

——清吉には、どう考えても、そんな妓の心理がわからないのであった。それをまた、噂ばなしに、

(あの妓は、うれしい意気だよ)

などと称たたえているこの土地の女や男達の気持もなおさら、解げせなかつた。

もつと、彼が首を傾かしげた話では。

木綿もめんのお力りきという妓がある。そのお力が、八幡前はちまんまえの小鳥屋の前まで来ると、人だかりがしていた。覗のぞいてみると、尾花家の稚こ妓どもが小鳥屋の亭主に何かひどく呶どな鳴なられていた。

(どうしたのさ)

ベソを搔かいている稚妓に聞くと、稚妓をさし措いて小鳥屋の亭主が、店頭みせさきの立派やかな鳥籠とりかごを示し、これは今、蒔絵まきえの鳥籠おさを註文してあるが、それが出来てくれば、さるお大名へ納める事

になつてゐる朝鮮渡りの鶇ひよどりで、ひとつがい一番で三十両もする名鳥なのに、この稚妓が今、菓子など喰わせたから怒つたのだと口から唾つばをとばして云つた。

するとお力は、

（おや、そうかえ。稚妓こどもだから、自分にひきくらべて、小鳥もお菓子を喰べたいだらうと思つてやつたのだらうよ。わたしも、自分の勤めの身にひきくらべると、こうしてやりたくなつてしまつたよ）

あれ——という間に、籠かごの口を開けて鶇ひよどりを青空へ逃がしてしまつた。

（何もさわ噪ぐこたあないじゃないか。三十両払つてやりさえすれば

いいんだらう)

首も廻らない借金のある上に、お力はまた、借金を増して、それを払ったという話なのである。

——中国筋、すじ大坂、しまばら島原と、諸国の遊び場所を通つて来たが、

清吉はこんな馬鹿な女の多い土地はまだ他では知らなかった。彼

が今、ひとあきな一商つうせんろういした通船楼の若いおかみさんなどは、前のお

蝶やお力などからみれば、まだまだ、くせの少ない方らしく思われた。

おとこあわせ
男 拾

「おや、おかみさん、好すいたららしい物をお買いなすったね。これは古渡こわたりじゃござんせんか」

清吉が立ちかけると、こう云つて、その内緒ないしよを覗のぞき、今おかみさんの求めた反物を沁しみ々じみ見ている妓おんながあつた。

辰巳たつみごのみを典型的に身に持つてゐる妓こだつた。すこし窠やつれに見えるのもかえつて男には魅惑がある。二十三、四というところであろう。瘦やせがたで、抜けるほど白い襟えり足あしが、寒紅梅かんこうばいにつもつた雪を連想させる。

「——あの人が無事でいたら、わたしもどんな工面くめんしても、こんなのを一い反たん仕立てて、今年あわの裕せに、着せてやりたいが……」
 軽い嘆息ためいきして眩つぶやくと、通船楼の若いおかみさんは、

「何さ、秀八さんともあろう妓こが、そんなさもない愚痴ぐちを云つて」
「ほんとに、わたしも少し臺とうが立って来たらしい」

「お座敷かえ」

「え、めずらしく。……この頃あ昼間のお客でもなければ、招よばれもしなくなつたとみえてね」

「また、自暴やけにお飲みでないよ」

秀八という名を、清吉はそこで記憶した。やがて、おかみさんに励ためまされたり、軽かる口くちを交わしたりして出て行つたうしろ姿を、清吉は、唾つばをのんでいるように、黙つて見ていた。

「いい芸げい者しや衆しゆうですね。あれで、売れないんですか」

その後で、こゝう話を出すと、

「どうして、この辰巳たつみでも、あんなに売れた妓こはなかつた程だけ
れど、ちよつと、おかしな事が、ぱつと聞えたものだからさ」

「へエ、どうした理わけなんで？」

「何がさ」

「そんなに流行はやつていた妓こなのに、急に客が落ちたというのは」

「よけいな詮せんさく索さくをおしでないよ。おまえさんは、長崎ながさき骨董こつとう
でも弄ひねつていればいいのだろ」

相手にもしてくれないのである。若いおかみさんは、さつさと
立って裏の川を覗きながら、今度はそこで晩したくの支度したくをしている抱
え船頭と、明るい声で何か冗じょうだん戲ぎを云っていた。

黒いくろ嬌きょう齒し

品物はあらかた捌さばけた。

いつもならば、路銀ろぎんだけを懐ふところ中に残し、後の金は悉しつ皆かい、長崎表へ為替かわせに組んで、身軽みがるになつて江戸を立つ頃であつたが、清吉は、五月になつても、まだ深川に日を暮くしていた。

諸国の女の世界ばかりを花客とくいさき先に廻まわつていたので、よく儲もうけもするが、

(今に見な、木乃伊ミイラ取りが木乃伊ミイラになつて、何か女で躡つまくから)

と、仲間の老人としより株かぶからよく云いわれていたが、清吉は肚はらの中で、
(ふん、そんな甘いんじやねえ)

と、笑う者をかえつて嗤わらっていた。

だが——今度だけは、少しその氣持のぐらつきを、自分でも認めないわけにはゆかなかつた。

プーンと藍あいの香のたかい裕あわせの仕しつけ糸を抜いたばかりなのを着込んで、今日も、灯ともし頃から、わざと人目離れた場末しんいの新しん石場しばの金子屋かねこやへ出かけてゆくと、

「おや、清せいどん」

はちまんよこちよう

八幡横町はちまんよこちようで、ぼったり、通船楼つうせんろうの若いおかみさんに出会ってしまった。

「やあ、どちらへ」

清吉が、てれて云うと、

「どちらとは、こちらから聞くとところだよ。おまえさん、先月の初旬じゆめには、もう長崎へ帰る帰ると云っていたのに、今頃まで、まだ深川にいたのかえ」

「ええ……実は少し、掛金かけの寄らない先様さきさまがあるもんですから」
 「嘘をお云い。何でも近頃は、せつせと金子屋へ通つて、秀八と会つてゐるといふことじゃないか」

「誰がそんな事を云いましたか」

「云わなくなつたつて、あたしにはちゃんと判つてゐる。秀八が挿さしている翡翠珠ひすいだまは、おまえがいつか、わたしの釵かんざしか良人の根付ねつけにどうですと云つてすすめた珠じゃないか。どう？ 恐れ入つたらう」

「……これは手酷てきびしい」

「会いたいなら、わたしの家うちだってお茶屋だし、わたしが会わして上げるものを、隠れ遊びなんざよくないね」

「相済みません。……どうもつい、お花客とくいさき先のお宅じゃあ」

「肩この凝りがほぐれないかえ。その解ほぐれないところにうま味があるんだけれど」

「そのうちに伺います」

「もう手遅ておくれだあね。……出来ちまつたものは仕方がないから、たった一言云っておくが、いつかもちよつと云つたように、あの妓この体には今、うるさい噂が立っているとところだからね。おまえさんは旅の者で何も知るまいが、怪我けがをしないようにおしよ」

黒豆を並べたようなこの若いおかみさんの嬌齒きょうしが、清吉にはこの時も、何か他国者の自分を嘲わらっているように見えてならなかった。宵詣よいまいりにでも来たのであろう。片笑かたえくぼ鬨まじでそう云うとすぐおかみさんの姿は、鳥居内うちの宵闇よいやみの人影に紛まじれてしまった。

冷たい指

「約束のものを持って来たが」

秀八の顔を見るとすぐ、清吉は、五十両の封金きりもちを三つ、ふたりの間へ置いた。そしてその手に杯さかずきを持った。

「じゃあ何も使つかい途みちを聞かずに……」

「元より、初めからの約束だ。おまえがそれを、情夫に貢^{いろ}ごうが、どんな借金に費^{つか}おうが、何も訊こうとは云わないから、安心して取^とつておくがいい」

新石場は、深川での新開地だった。金子の二階からは、石川島の懲役場の灯^{しおきぼ}がひろい闇の中にポチとみえる。秀八は、暗い海へ面^{おもて}を向けて、じつと何か思いに沈^しんでいた。

欣^{うれ}しそうな顔もしない。——ひとこと、

(ありがとう)

とも云わないのである。

おまけに初めから、費^{つか}い途^{みち}は訊^きいてくれるなという約束だった。百五十両といえ^{そろばん}ば算盤の弾^{はじ}き方^{かた}を知^しっている清吉には莫大な金

に違いなかつた。彼の一生涯でも思い切つた気前の一つとなるであらう程な額たかである。

「仕舞つておかないか。人が来るとよくないから」

さかすき
杯を出した。

杯いとぞこの糸底で秀八の冷たい指に、清吉の指が触ふれた。

「じゃあ、貰もらつておきます」

厚い帯のあいだへ、秀八は金を仕舞つた。清吉は、自分が惜しい眼でもしていないかと惧おそれて、床の間の懐月堂かいげつどうの幅ふくを見ていた。

意気といつたようなもの——きやん 俠といつたようなもの——この辰たつみつみの女だけが持つさまざまな心伊達だてだの肌合はだあいの中に溶け入つて、

清吉は一生涯に一度の思い出を創るつもりで、算盤そろばんを捨てているのだった。

——と云つても、ただの「遊び」でそれをしているほど、彼はまだ枯淡こたんな粹すいじん人では勿論なかつた。やはり秀八のずば抜けた緻きりようりよう、倭きやんな辰巳肌のうちに、どこことなく打ち潤しめっている窠やつれの美しさが、通船楼で見た時から受けたつよい魅力であつた。

あれから、わざとこの場末に避けて、七、八回会つていた。いつでも何か物案じな秀八の眸ひとみだつた。金の事なら——とあつさり引きうけたのが今夜の事となつたのである。

もつとも、その前後に秀八が杯さかずきの嘆息ためいきに、

(いッそ、他国へ行つてしまいたい)

と、二、三度つぶやいた。

清吉も心の裡で、

(この女となら——)

と、思わないでもない。長崎へ行かないかと云えば、一緒に逃げて来そうな気振もある。

けれど、それを条件に、金を出すのは、辰巳遊びでいう——野暮やぼというものになろうし、また、折角の金が死ぬと考えて黙つて——女の心のうごきを、彼は、見ようとしていた。

半刻はんときほど、静かに飲んでいると、秀八は急に落着かない顔して——

「やっぱり、わたしは今夜のうちに済まして来よう。清吉さん、

このお金の費い途つかみちがついたら、わたしを連れて、すぐ江戸を立つてくれますか」

自分の胸だけで、もう決めていたような口くちぶり吻くちぶりだった。清吉はむしろ思う壺つぼだった。百五十両が、この女の身代みのしろになるならばむしろ安値やすいものだという算盤そろばんが——無意識のうちに胸で働いていた。

「え。おれと？」

手を握にぎって、見つめると、

「九刻このつころ、御旅おたびの汐見松しおみまつの下で落会おちあひっておくんなさいな。

——私も、旅支度たびじたくをして行きますから」

秀八はそう云うと、じつと清吉の手を握り返して、先に金子の

座敷をもらって帰って行つた。

みずちようし
水調子

ここのつ
九刻——といえはもう夜半、だいぶ間があるなあと、杯さかずきを見
て清吉は独り思う。

支度と云つても、もう商いの荷はないし、旅馴れてもいるので、
これに、脚絆きやはんと草鞋わらじさえつけければ、だが——ふと不安になつて
来たのは、

(ほんとに、来るのかしら?)

秀八の心の底だつた。

無心した金さえ費い途を、訊いてくれるな、訊くなら要らないと云つた女。——考えれば危ないものと、どうしても思われてならない。

通船楼のおかみさんに嗤われたくない気がしきりにして来る。百五十両という額も、今さら、身に過ぎた大金に思えて惜しくもなつた。——けれど、ほんの通りがかりに、三十両もする小鳥屋ひよどりの鶯をツイと籠から放して、生涯の借金に背負つても苦にしないでいる妓もある深川かと思うと、こんな事では、辰巳たつみで遊び客の資格はないのだと、あの通船楼の若いおかみさんの鉄漿おはぐろがまたどこかで嗤わらっているような気がするのだつた。

なるべく、此家ここで時をつぶしていようと、清吉は銚子ちょうしを代え

だが、手酌となるとすぐ酔ってしまった。

ごろりと横になった。

葉桜がどこかで風になっている。ここの風にはじつとりと潮気しおけがあつた。若い手足をのびのび投げて吹かせていると、

だまされて いるのが遊び

なかなか

だまだま騙すそなたの 手のうまさ

くいなくいな水鶏啼く夜の

酒の味あじ……

近所の窓から洩れる忍び駒が、熱い耳みみたぶ朶へ、冷んやりと流れ
こんでくる。

「ここらが辰巳の遊びの味というものかしらて？」

だが清吉は——例えば大きな博奕ばくちを賭はっているように結果が待たれた。黒と出るか白と出るか、その結果のわかるまが値打物ねうちものとは思うが、やはり秀八にこのまま打うつ捨ちやりを喰わえば場あ句げまる損だし、約束した通りに行けば、金も生きるし、心意気も立つし、この先もう一苦労してもいい相手だから、ずいぶん安値やすいものにつくが……などと彼の頭はやはり、算盤そろばんとは縁が断ち切れなかった。

「まあ、お寝よっているなら、搔かき巻まきでも持って来てさし上げましたのに。……お風邪を引きやしませんか」

金子の女中が上がって来て、彼の傍そばへ、用ありそうに坐まった。

「なあに、寝ちやあいないよ。いい気持であるの水調子を聞き惚みづちようしれていたのさ。……今何刻なんどきだえ」

「もう八刻やっごろでしようか」

「よその爪弾つめびきなんぞ聞いていると、何だか、故郷心さとごころがついて、気がめいっていけねえや。誰か、つき交ぜた顔で、三人ばかり招よばないか、飲み直して、からつと笑つて帰ろう」

「……でも、今、お迎えに見えていますよ」

「え。……誰が」

「通船楼のお使いが」

みお
滯つくし

金子の勘定を払って清吉は使いに来た通船樓の男と、ぶらぶら河岸かしを歩いていた。

「いったい、何の御用でしょう」

気にかかるので、しきりに訊きいてみたが、使いの男は何も知らない様子で、

「さ、何も伺うかがっておりませんが、ただ、おかみさんは先へ行つて、土橋どばしの梅掌軒ばいしょうけんの床几しょうぎで待っているから、あなたを呼んで来てくれと仰おんつしやつただけなんです。——何ですかいつぞやお求めになった、唐棧とうざんを包んで持つておいでになりましたから、あの反物たんものの事じゃございませんか」

「はてな。あれやあほんとの古渡りこわたりで、新渡の贗物いかものを売ったわけでもないが。……その梅掌軒しるこやというなあ汁粉屋しるこやか何かですか」

「いいえ土橋えきしやに出ている売卜者えきしやですよ」

「へえ、あんな狭な気質きやんきだてのおかみさんでも、卜うらなどを観みてもらいに行きますかね」

使いの男は、土橋えきしやのてまえまで来ると挨拶して、店へ帰つてしまつた。

竹の柱はっけに、八卦けんこんの乾坤けんこんを書いた布の囲い、暗い川風うごいにうごいていた。筮竹ぜいちくの前に、易者の姿は見えなかつた。——覗のぞき込んで、ちよつと清吉がぼんやりしていると、

「こつちだよ、往来から見えるから、裏へ廻つておいで」

と、川の方に向っている幕の蔭かげで、通船楼のおかみさんの声がした。

巨おおきな柳樹やなぎの根を廻まわつて、裏の方へ行つてみると若いおかみさんは、その床しょうぎ几ぎに腰かけて、川の櫓音ろおとでも聞いているようにじつとしていた。

使いの男が云つた通り、いつぞやの唐棧とうざんらしい丸い物を、風呂敷につつんで膝ひざにのせていた。

「何ぞ、御用ですかえ」

その唐棧なら、突き戻されるような品でもないし、何か、苦情くるけいを云われたら、あべこべに云つてやる気で、清吉は小腰こがを屈かめた。

「清せいさん……おまえ今夜、秀八に金をやったらろう」

「えっ……?」

「今、あの妓は、家へ来ているんだよ」

「へえ、おかみさんに、話しに行つたんですか」

「わたしじゃないのさ。……会つてゐるのは、与力衆と、伝

馬牢の同心だよ」

「牢役人に……。はてな? ……それやあどういふ理でございま
しょう」

「だからわたしが断つておいたじゃないか。——あの妓の情夫は、
濡の伝兵衛という大泥棒なのだよ」

「げっ、そんな紐があつたんですか」

「白魚の黒いのがあつたつて、紐のない芸妓なんかいるわけは

ない。おまえも存外、色里いろざとを知らない人だねえ」

「そして、与力衆や伝馬役人と、どういうわけでお宅で会っているんですか」

「その滯みおの伝兵衛が、ついこの春先、お縄なわになったのさ。ぱつと噂もになって、あの妓が売れなくなったというのは、大泥棒の滯みおが紐ひもだという事がお白洲しらすで知れたからで、伝兵衛のお仕置は、獄門と極くつたらしいが、どうしても、あの妓はそれを助けたいというので、お上の沙汰さたも金次第だから、その筋へそつと贈まわす賄賂おくすりの金を工面していたらしい。……そこへおまえさんという鴨かもがかか

つたから、早速、馴じみの与力衆から手を廻して、今、わたしの出て来る前に、離室はなれでその取引さ」

「へエ、じゃああの金で、瀦みおの伝兵衛とかいう泥棒の男の生命いのちが助かるんですか」

「まさか、お追放ついほうとはゆかないけれど、獄門ごくもんのところを遠えんと

島うぐらいにはなるのは御定法ごじょうほうとされている。——つまらない

眼あに遭つたのはおまえさんさ。もう金のほうは諦めあきらものだが、こ

の上にまだ、曰いわくつきの妓おんなにかかっていると、どんな目にあうか

も知れないから、親しい誼よしみに、一言ひとこと教えておくよ。わたしの

家うちでちらと見かけたのが、おまえさんの落目おちめの機きツかけになつた

なんて、生涯云われるのは寝ざめがわるいからね」

「御親切に、有難うございます」

「こんな事になるなら、早く打明けておけばよかつたけれど、ま

さか、おまえさんがそんな甘納豆あまなっとうみたいな人とも思わなかったから……」

「あはははは、これあ御挨拶でございますね。清吉も、女にや甘いに違いございませんが、これでも色街の事には、年期を入れておりますから、溝更、溝へ金どぶを捨てるようなへマはしていないつもりでございます」

「オヤ、そうなのかえ。わたしやあまた、半年も一年も、旅の空で稼かせぎ溜ためたお金をも思つて、余計な心配をしたわけだが……」

「いいえ、この清吉だつて、初手しよてからそれくらいな事は、感づいていないわけじゃなかつたんで」

「へ。知つていたのかえ」

「あの女の心意気に——ええ、百五十両くれてやりました」

「心意気に？」

くすぐ
擦すつたそうに、通船楼のおかみさんは笑った。闇の中でも鉄おはぐ

漿ろは光った。

「……成程なるほど、心意気かえ。……じゃあ他人から何もおせツかい

は要いらない事。おまえさんも、二、三年辰巳へ商あいに来たおかげで、たいそう深川の水に滲しみた通つうじん人におなりだね。じゃあ来年

またおいで」

心意気といえは、自分のハマも隠されるし、先でも賞ほめてくれるかと思つていたが、案外、それが氣に喰くわなかつたように、通船楼の若いおかみさんは、さつさと、清吉を置おき去ざりにして、暗

い横丁へ急いでしまった。

裏うらで燈ともす灯ひ

ごぼごぼと、咳せきの音がする。うどん屋へ外はずしていた易者の梅掌軒けんがもどつて来て、もう筮せい竹ちくを鳴らしているのだ。

「唐とう棧ざんを持っていたのに……その事は何も云わなかったが」
若いおかみさんの曲がった横丁へ、清吉も曲がって行った。

彼が尾ついて来るとは知らないもののように、通船楼しとみの若いおかみさんは、薄暗い質屋庫しちやぐらにひっ付いている葎障子しとみを開けて、そんな所を潜くぐりそうもない姿をついそこへかくした。

「……あ、質屋へ？」

あわせどき
 袷季節に、買ったばかりの袷の反物を。

それを買う時に云った歯ぎれのいい若いおかみさんの言葉が、

清吉の耳へ甦よみがえってきて、何か皮肉なものを感じさせた。

「これで、あそこの楼うちの内緒ないしよも、知れたもんだ……」

はちまんがね
 八幡鐘が横丁を鳴って通った。

「ア、九刻このつ」

清吉は、急ぎ出した。通船楼のおかみさんは笑ったが、秀八の金の使い途つかみちを聞いてみると、清吉は、あの女が、確かに自分の心意気を受け取っているものという感じがした。かえって、頼たのもしい女だという気持がつよくして来た。

魚の皮みたいな鈍い海が見えた。漁師の家から赤い火がもれて
いた。御旅おたびの曲まがり松は、磯原いそはらの真ん中であつた。

(……来てゐるかどうか?)

清吉は、心とは反対に、足を弛ゆるめて近づいて行つた。

秀八は来ていた。

座敷ざしき着を代えて、黒っぽい着物の裾すそを折り、髪も崩くずして、手拭
の耳くわを啜くわえていた。

「……オつ」

つい、意外だったような声を清吉は出してしまった。

「来ていたのか」

「だって、約束した筈じゃありませんか」

「いや……俺おれの方が、つい遅くなつたからさ」

「おまえさん、支度したくは」

「途中ですらあな。……何も大した身支度みじたくは要いりやあしない。それより、おめえはもうそれでいいのか」

「ちようど、深川の水に六年住んで、今夜が見納めみおさかと思うと、

何なにだか、名残惜なごりしいけれど……」

「見納めだなんて、縁起えんぎでもない事を云わぬがいい。また、いつだつて江戸へ来られるじやないか」

「でも、長崎くんだりまで行つて、お前さんに捨てられたら、わたしやそれこそ迷つてしまう」

「今は、何も云うめえ。どこか旅宿やどへでも落着いてから云うが、

おれはおめえの心意気が欣うれしいんだ。捨てるくらいなら初めから、
 費つかい途みちも聞かずにあんな金を出しはしない」

寝しずまった漁村を見ながら、波明りに添って二人は歩き出した。清吉はもう金の惜しみを考えなかった。——ただ侠きやんな肌あいの中に、濃こい人情と強い恋を持つ深川のおいが、艶なまめかしく、自分を絵の中につつまみこんで、波の音までが享きやうらく楽らくに和しているかと思われた。

「……あの」

口籠くちごもりながら、秀八はふいに足を止めた。

「なんだい？」

「……ちよつと、もいちどわたし、家うちへ寄つて、忘れ物を取つて

来たいんですけど。ここで待つてくれますか」

「近いのか」

「ええ、そんなにはない所だから、ちよつと走つて行けば」

「そうか、じゃあ行つて来な」

「すみませんが——」

何となく、それが、うつつな云い捨てようであつた。

待つていると云つたが、清吉は、秀八の後から尾けて行つた。

潮しおくさい漁師町りようしまちの露地ろじへ、彼女は、小走りに入つて行つた。

トントントンと、そこの一軒を忍しのびやかに叩いて、

「おばさん、おばさん……。秀八ですよ、もいちど開けて下さいな」

老としより婆の聲が聞え、彼女は、あわてて中へかくれた。穢むさい漁師小屋だった。魚油ぎよゆを燈ともすとみえ、臭い灯ひのにおいがして、家の中に、黄色い明りがついた。

「坊やは。……おばさん……坊やの顔を見せて！」

彼女の体も声も、生理的にわなななしていた。——と見るうちに、その藁わらむしろの上に敷いてあるうす穢ぎたない蒲団ふとんの中へ、彼女はふるえつくように身を入れた。

そして、自分で白い胸をはだけると、寝ている幼おきなご児の唇くちへ、強しいるように、乳ぶさをふくませ、

「……坊や、坊や。……わたしだよ、わかるかえ。……もう当分はおわかれだから、もういちど帰って来たんだよ。さ、たんと吸

つておくれ。たと吸つてね……」

一心に乳を吸う幼児の唇の音と——その顔の上へ顔を重ねて泣いている彼女の涙の音とが——戸の外まで聞えるように思われた。

「……?」

じつと、外に立ち竦すくんで、雨戸のふし穴からそれを覗のぞいていた清吉は、深川の水の底を——辰巳たつみ女の肌あいの底を——今こそ眼にまざまざと見せつけられたように固かたくなっていた。

「ああ……おれにも」

ふと彼は、遠い長崎の家にある自分の妻と子を思い出した。

油のように海は眠っている。

櫓やぐら下したや八幡はちまんや、深川の灯ひの空は、今を潮時しおどきにぞめいて

いた。

砂を蹴^けつてただ一人、逃げるように浜を素^すつ飛んで行ったその
夜の男は、もう翌^{よくとし}年から、この土地へ商^{あきな}いにも来なかつた。

青空文庫情報

底本：「柳生月影抄 名作短編集（二）」吉川英治歴史時代文庫、
講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2007（平成19）年4月20日第12刷発行

初出：「オール読物 臨時増刊号」

1937（昭和12）年4月

※初出時の表題は「春燈辰巳読本」です。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

春の雁

吉川英治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>